

## ■ 基本的には今しばらくドル強気の展開が続く…

米国の一部の州や欧州の一部の国で、経済活動の再開が段階的にスタートする運びとなっている。感染拡大の第2波に見舞われる可能性は否定できないものの、とりあえず市場はこうした動きを好感している模様である。

また、昨日(29日)は米ギリアド・サイエンシズ社製の「レムデシベル」が、米政府によって本日(30日)にも新型コロナウイルス治療薬として緊急承認されると伝わり、良かれ悪しかれ市場には、少々先走り気味の「先行き楽観」と「リスク選好」のムードが広がっている。

少なくとも、欧米の一部の国や地域で行動規制が段階的解除ということになれば、株式現物や先物などの「売り方」は一旦ポジションを手仕舞っておこうと考えやすい。新たな売りが仕掛けにくいなか、全体に買い戻しの動きが強まることで市場の強気ムードが盛り上がれば、むしろ新たな買いの手が伸びてくる可能性さえある。結果として、米・日株価がともに強含みの展開を続けられれば、市場全体にリスクオンのムードが広まって、無暗に円買いを仕掛けようとする向きも減る。ただし、言わば「リスクオフ下で生じた円買い・ドル買いの巻き戻し」が起こるわけであるから、同時にドルも少々含みとなってドル/円自体の上値は押さえられがちとなる。

とどのつまり、今しばらくドル/円は方向感の見出しにくい展開が続くこととなる可能性が高く、そうした見通しを前提に個人投資家がFX取引で逆張りを仕掛けるものだから、そのぶん更に値幅が狭められるということになる。

とはいえ、やはり基本的には暫くドル強気の展開が続くと見る。

その理由は数あるが、一つに目下の日本におけるウイルス感染拡大の状況や目の前の危機的状況に政策対応する際のスピード感の欠如、日銀による無制限の金融緩和姿勢などを勘案した場合に、とても円を強気で買い上げて行く気にはなれないという現実がある。もちろん、目下は他国の例に違わず日本も財政出動を積極的に行っているが、果たして将来的に「その穴埋め」が可能かどうか考えると大いに心許ない。

一方、ユーロ圏ではもともと盤石とは言えない各国の財政状況が今後急激に悪化する事態は避けられず、そうした事態に欧州中央銀行(ECB)がどこまで対応し切れるかが問われる。先に米S&Pグローバルレーティングがイタリアの国債格付けを据え置くとし、市場の混乱は回避されることとなったが、そもそも「格下げでジャンク債に転落か」などといった観測が事前に持ち上がることで大いに憂慮すべきことなのであって、やはり当面はユーロを強気で買い上げて行くことも難しそうである。

少し振り返ると、トランプ米大統領は4月17日の記者会見で「ドルはとても強い。強いドルは全体としてとても良いことだ」と語っている。ここにきて、トランプ氏が強いドル政策を容認するようなコメントを発するのは、これが初めてではない。一つには、今こそ「米国第一」イコール「強いドル」で、コロナ禍に敢然と立ち向かう『戦時の大統領』を米国民に印象付けようとしているのであろう。また、米政権が新型コロナウイルス対策としてこれまでに実施を決定した財政出動の規模が3兆ドルに迫るレベルにまで膨れ上がっていることを考えても、やはり当面は「強いドル」が非常に重要ということになる。

足下のドル/円については、とりあえず一目均衡表の日足「雲」下限が下値サポートとして機能し続けるかどうかを見定めたい。仮に下抜けた場合、一旦は105円台半ばあたりまで下値を試しに行く可能性があるだろう。逆に上値追いの展開となれば、まずは日足「雲」上限(現在は107円台半ば)と試すこととなる。

一方、ユーロ/ドルについては前回更新分の本欄で「とりあえず1.0800ドル処では試し買いを入れてみるというのも一手」と述べたが、実際に同水準は下値サポートとして機能した。目先、再び1.1000ドルを試す可能性はあると見られるが、基本は戻り売りのスタンスで臨みたい。

(04月30日 11:00)